

読者のページ

自治体の中心と周縁

市民局 山口 順子

春はまだ名のみ、と思うころ「横浜」をマスコミの社会面にショッキングに登場させる事件が、ここ二年続いている。昨年の浮浪者殺傷事件、この二月の寝たきり老妻殺害事件——老若貧富、男女、生死といったさまざまな軸が錯綜する都市の中心から、刃をつきつけられた思いで、報道に接した。この二つの事件の渦中にある「市民」たち——「都心」というトポロジカルな中心にいる浮浪者、あるいは「中間」意識階層の家庭に住まう落ちこぼれの中・高校生、共働き夫婦、ねたきりの老人は自治体行政の中でいつのまにか

周縁におしやられていく顔ばかりだ。「中心」からというのは明らかな誤謬であって、実のところ、刃は「周縁から」そのひずみに耐えきれずに発せられ、とりもなおさず中心にどっかりあぐらをかく者ののだ元に向けられている。

開きにくれば教えてやろう、相談にすればのってやろう、という高慢さをちらつかせながら慇懃無礼な衣を着ることはあっても、中心から一步も踏み出そうとはせず、誰のためのものか忘れてしまった情報を握りしめたまま、可視、不可視を問わず固定化した権力構造にしがみついている。主権者としての市民意識に根ざさずして、そこから行動を発せざるして、自治体行政をどう動かそうというのだから。

今こそ求められるのは、中心と周縁の位相を、職員自ら意識のなかで、互換させていくことだ。「市民の立場に立つ」とはいかなることを意識するか。甲けい紙の中心に市民がいることを忘れてはいまいか。「王様は裸だ」と笑われること

ぐらいは覚悟して、カウンターの内側から、スチールの机の上から、想像力を解放させることが必要だ。

行政の視点

教委事務局 安楽岡信夫

仕事、小・中学生を持つ親の意見を聞く機会がある。例えば「子どもの指定校はA校だが通学に三〇分もかかる。B校ならば一〇分で通えるから、通学規則を変えてB校に行けるようにしてほしい」とか「新しい中学校ができて、高校受験を控えた新三年生だけは、今までの学校に残してほしい」とか。

確かに、近くの学校へ通うほうが楽であろうし、新しい学校へ移るのは不安であろう。それは理解できる。しかし、だからと言って「ごもっともです。ご希望通りにしましょう」と答えるわけにはいかない。逆にこれらのケースでは、希望通りにできないことを説明することになる。前者の場合、通学時間の単純な比較を理由に通学規則の変更を認めれば、他の同様の地域

でも認めざるを得なくなり、その結果、教育施設の問題（学校のバンク等）が生じかねない。後者の場合、三年生を欠いた中学校では正常な学校運営は難しく、一、二年生の学校生活に悪影響を及ぼす等々。

親身になって市民の意見を聞くことは必要だが、市民と同じ視点に留まっていけないとぼんやりながら感じている。乱暴な言い方をすれば「市民の希望通りにしてすべてうまくいくなから、行政はいらない」のである。行政には市民とは別の視点、市民に欠落した視点を持つことが要求されると思う。例えば

△あとがき▽

ねたきりの老人を抱えた家を訪問した後、重苦しい気持ちにさせられることが多い。本人自身の苦痛に加えて、世話している人も疲労し、多かれ少なかれ心の内に葛藤を抱えている。そんな中で、野田さんは実に爽快であった。トレパン姿の軽い身ごなし、冷凍食品やディナーサービスを取り入れた食事作り、マジックテープをつけたパ

ば、他の地方への波及、市政全体の整合性を考慮した全市政的視点、何年か先の展望を持った将来的視点等。

もっとも、偉そうなことを書いてはみたが、私、当面の問題の処理にあたふたとしている市職員一年生である。

『調査季報』は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一一二〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

ジャマ、手製の車椅子や手すり、家の中が創意工夫にあふれている。重度の障害をもつ妻と二人暮らしの生活をしている人とは、とても思えない。

「ふだん記」に投稿した文章が集まって「二人の自分史」がつい先達って完成した。戦前篇から読み進むにつれ、同時代を生きた伴侶への愛しさが、その底流にあるのだ、と納得した。五〇年余の歳月の重さ。（中川）